馬の絵画、写真、彫刻の展示会を企画

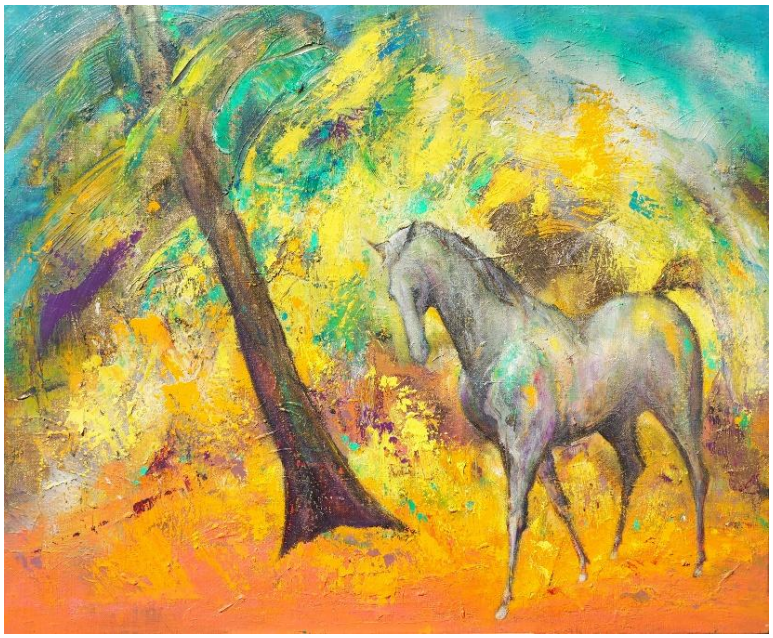
日本ウマ科学会評議員　倉田タカユキ
早稲田大学文学部卒。在学中に馬術部に所属し主将歴任。ルサロン、ベルギーオランダ国際美術展、コルシカ美術賞展、パリ国際美術展などに推薦出品するなど、国内外の数多くの美術展に出展。 2016年～2024年サロンドートンヌ展に連続出品。日仏現代美術世界展にてサロンドートンヌ賞受賞。個展の開催は 30 回を数える。
　現在、早稲田大学馬術授業の講師を担当。早実のコーチも歴任し、馬術を教えながら画家として活動し、馬事文化に貢献したいと考えている。
　日本美術倶楽部 https://www.nihonbijutsu-club.com/uma/
https://umakurata.studio.site/
　こよなく馬を愛する画家による『伯楽会』事務局

2024年11月25日・26日、両国の KFC ホールで開催された学術発表会の会場において、馬の絵画、写真展を開催しました。今年は彫刻の若手作家の作品も展示し、10 人の作家による展示会となりました。馬にかかわりながら、制作を続けている作家の表現に注目いただければと思います。作品にご興味のあるかたは下記にご連絡下さい。

（kurata-tam@nifty.com　伯楽会事務局倉田）

【絵画部門】

倉田タカユキ



希望の白馬　Ｆ20　油彩

　早稲田大学の馬術部には20頭の馬がいます。この中から５頭のおとなしい馬を使い一般の学生に馬術を教えながら、馬の絵を描き、フランスの国際展・サロンドートンヌに毎年出品しています。馬に乗る立場から馬を描いています。個展では馬好きの多くの方々との交流を楽しんでいます。

振り向く馬　F3　油彩
馬が振り向いたときの首のしなりが好き。

駿 馬
馬場馬術の演技中の駿馬。
ステンシルという技法で馬のしなやかな姿態、ハミを受ける感覚を表現しました。

奈良綾乃

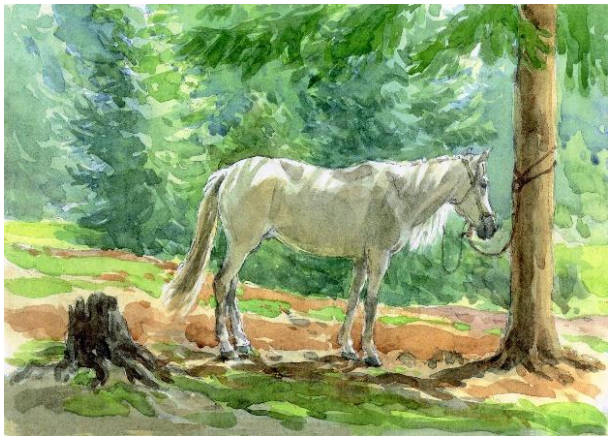
1975年鎌倉生まれ　講談社フェーマススクールズ受講後、美術家・川端洗耳氏に師事
2000年競馬雑誌・優駿「ダッフィーのイラスト塾」にて月間大賞受賞
ヤマハリゾートつまごい「つまごい乗馬倶楽部」のための小冊子制作
プラザエクウス渋谷のショーケース展示等に参加　銀座・池袋等でグループ展参加　伯楽会会員

AUTUMN
モダンクラフト紙にミクストメディア
秋と斑毛の色彩の妙を表現してみました。

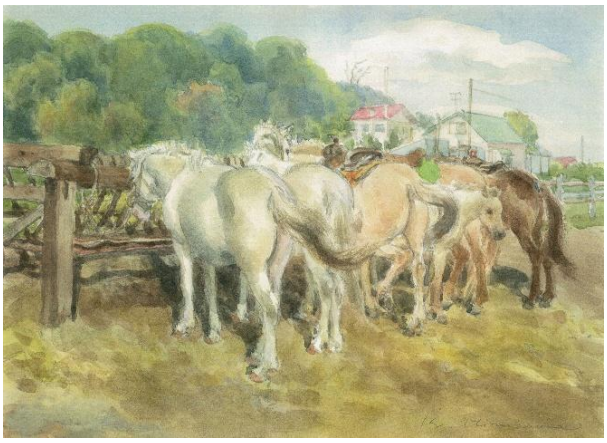
THE BLUE HOUR
青色のマーメイド紙にミクストメディア
昼と夜の間の青い時。
幻想的なフリージアンホースの周りには
特別な時間が漂っているように思えます。

水沢潔

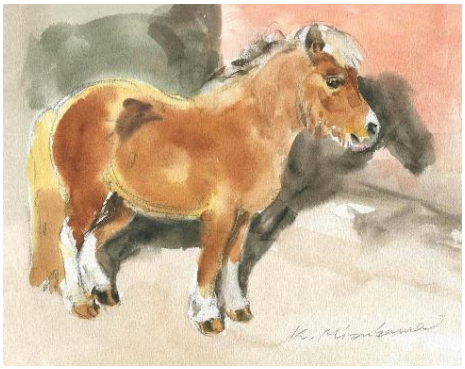
1951年長野県生まれ
銀座サエグサ画廊　京都競馬場エキジビジョンホール　銀座タカゲン画廊　JRAプラザエクウス渋谷　JRAプラザエクウス梅田　新宿アートコレクション・コムニカ　船橋市ギャラリーイグレック、生田緑地ギャラリー等で個展　日本橋三越ピアッフェにて馬の絵展　2005年NHKテレビ『いっと６けん』で制作実演と作品紹介　JRA馬の絵展　優駿賞受賞　グループ展多数　JRA4 点買い上げ
≪取材旅行≫
1973年ヨーロッパ中近東東南アジア６か月　1977年ヨーロッパ中東中近東９か月　1986年中国３か月



カザフの白い馬・天山天池にて



道東・トーフツ湖畔の牧場にて



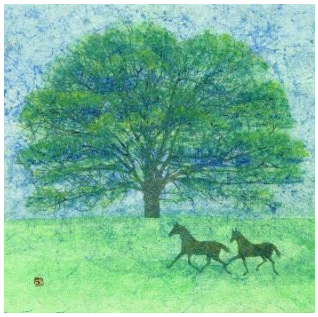
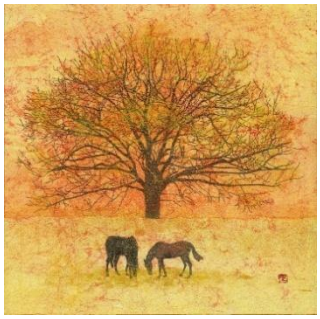
陽だまりのポニー

調教風景

子供の頃から絵を描くのが好きでしたが夢中になって描ける対象が見つかりませんでした。18才の頃馬事公苑で馬と出会い、ようやく本気になって描くことの出来る対象に出会うことが出来ました。動き、走り回る美しい馬を描く！これは面白い！子供の頃から山菜採りや小魚獲りが好きでしたが（たぶん原始的な本能）同様に絵で馬を捕まえる。動物の絵は写真を見て描くのが一般的ですが、それとは全く異なった描き方、馬を見て、その場で描くという方法です。描きたい馬の姿は、斜め後方から見た爆発的なパワーを秘めた美しい後肢。放牧直後の跳ね回る姿。仔馬の動き・しぐさのすべて。馬同士がじゃれ合う姿。上手い人が乗った時の人馬一体となった美しい姿。野原で草を食む姿。

家入圭

公募展多数入選（都知事賞受賞）田無、所沢、小淵沢、清里、銀座等にて個展開催　伯楽会会員
　現在タイにて制作中

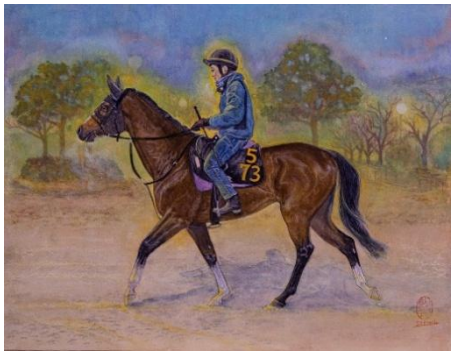



胡桃の四季

胡桃樹の移ろいと共に過ごしていたころの馬場の情景です。
今はタイの異国で、感じる刺激・興奮・緊張の中で描いています。

斎藤いつみ

日本画家。
東京都立工芸高等学校デザイン科卒業　山口大学共同獣医学部馬予防医学実践力プログラム修了。
馬という素晴らしい生き物を表現するために、乗馬や競馬など様々な角度から馬を観察しています。
凱旋門賞に挑戦するようなグランプリホースたちから、人知れず努力を積んでいる馬たちまで、分け隔てなく多くの馬の素晴らしい瞬間を描き残すために筆をとっています。



星の光る朝
競走馬の調教を取材する時には毎回夜明け前から伺います。薄暗い中、これから運動に向かう若い牝馬と調教助手の姿を描きました。
毎回騎乗中に馬に微笑む瞬間がある、そんな優しい調教助手さん。

朝の光
子供の頃から早起きができない私でしたが、絵の取材をする時だけは例外です。
美しい朝の中、新馬を先導する男馬の姿を描きました。運動後の馬の表情も、朝の光と同じくらい魅力的なモチーフです。

凛
モデルはサラブレッドの馬術競技馬の子です。黒く細身の若々しい馬体を弾ませた姿がとても魅力的な子でした。いつか才能が開花する時がきますように。

柴田眞美

1961年東京生まれ　女子美術大学、東京芸術大学大学院（博後）出身
日本画の団体展である創画会を経て、現在、現代造形表現作家フォーラム 企画運営委員
跡見学園女子大学 文学部教授（美術）

エレボス　F20号（72.7×60.6cm）日本画

エレボス（Erebus）：地下の暗黒の神、原初の冥界。地球の生命が生まれる以前の暗黒の冥界というようなものを、動物（馬の頭部の骨格）の姿を借りて、天然鉱物である日本画の岩絵具や動物の身体である膠、植物からできた和紙や木などの素材と対話しながら表現しました。

【写真部門】

安藤佳子

1960年大阪で産まれる。高校卒業後OLとして働きながら趣味で入った乗馬クラブ。気が付いたらスタッフとして働いていました。大阪で創業されたクラブですが、その頃全国展開が始まっていて千葉へ赴任。そこで学生馬術をしていた主人と出会いました。以来馬との縁は途切れる事なく、趣味で始めた写真の被写体となっています。乗馬クラブを辞めた後、縁があって船橋競馬場で誘導馬に乗るバイトを通じ競馬の世界ともご縁が。馬への興味は尽きず、野馬追いに通ったりも・・・。ずっと見てみたい！と思っていたばんえい競馬は一度では済まず、年に何度も足を運ぶファンに。

2020 冬　　家畜改良センター十勝牧場

普段は一般の入場は出来ません。1月中頃～2月の中頃の平日に一般公開が行われます。それは冬の楽しみになっています。牧場全体が一般公開されるわけではないので。

小久保厳義

20代の頃にふと見たJRAの CM がきっかけで競馬場を訪れ、目の前を走る馬の姿に興奮したのを覚えている。当時は今まで撮って来た鉄道や航空機の延長でレース撮影を楽しんでいた。2004年に帯広競馬場でばんえい競馬を撮影し、馬体の大きさや平地競走とは違う力強さと迫力にふれて重種馬も撮り始めた。その中で、馬が見せてくれる表情や景色を感じることで、馬たちの魅力をより表現したいと思うようになった。北海道に移住し馬を見て感じる機会が増え、他者の作品を勉強することで撮り方が変わった。

馬がいる環境に合わせて、馬の気持ちや表情と仕草を感じ取りながら、一瞬だけ見せてくれる姿を逃さないように心がけて、機会を与えてくれたその馬に、失礼がないように撮影している。また、馬にはそれに携わる人が欠かせない。馬に関わる人も同じ心構えで撮影し、馬・人・撮り手の関係も大切にして作品作りに努めている。

光と希望の世界へ

２月末でもマイナス十数度まで冷え込む十勝の牧場で撮影。
11ヶ月間の暗い世界から、光のある世界へ。
生まれてきた姿を見て、競馬場での活躍に希望を託す。
我が仔を優しい瞳で見つめる母馬と、うっすらと見える母馬を見る仔馬。お互いに何を思うのか。
言葉が無くてもお互い寄り添い育っていく姿を見ると、それが「絆」なのかと思う。

これぞ天職

道内各地で馬搬や馬耕を行っている、西埜馬搬の西埜さんと日本輓系種のカップ号。

北海道は、こういった馬たちのおかげで農林業が発展し今の景色がある。
競馬場ではなく、山で大木を牽き、畑では大地を掘り起こす姿を撮影していると、重種馬は物を牽くために生産されてきたのだとあらためて思う。仕事をしているカップの姿を見ているとそう感じる。

頂点をめざして

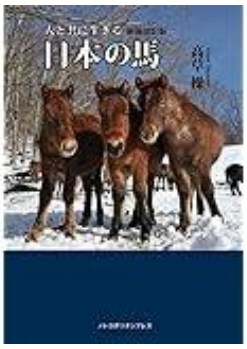
北海道江差町の海岸で引き運動をする２歳馬を撮影。
４月に帯広競馬場で行われる、ばんえい競馬の能力検査に向けて、２月頃に牧場から海岸まで輸送し、生産者などが運動を行っている。
この場所は、昔から長い砂浜と丘のような起伏があり、持久力や筋力を付ける運動に適している。ここで力を付けた馬たちが、競走馬になりばんえい競馬の頂点を目指す。

高草操

東京都渋谷区生まれ　青山学院大学文学部史学科卒

日本写真芸術専門学校専科修了　写真家秋山亮二氏に師事

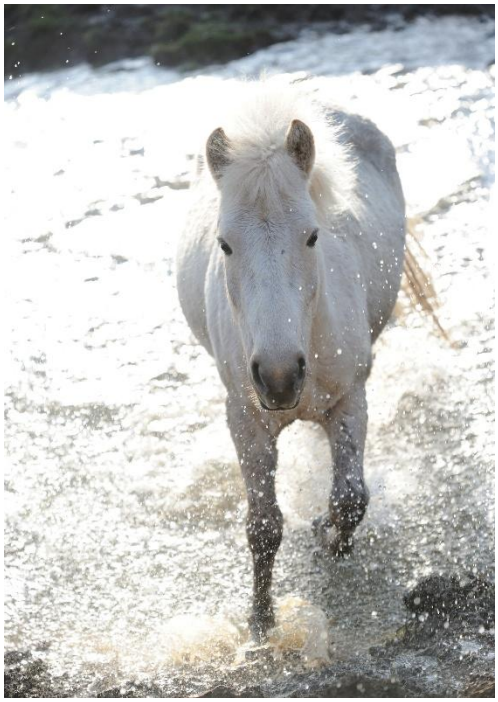
「日本の馬」をテーマに日本在来馬や古来の馬産地・岩手県遠野の撮影を続け、個展開催や多数の雑誌に写真や記事を寄稿している。また遠野産馬専門の情報誌「遠野馬通信」の責任編集・発行を手掛ける。第 1 回遠野市馬事文化賞、2020年度 JRA 賞馬事文化賞受賞。



＜著書＞
「遠野馬物語」（里文出版）
「人と共に生きる　日本の馬」
（里文出版 / メトロポリタンプレス）

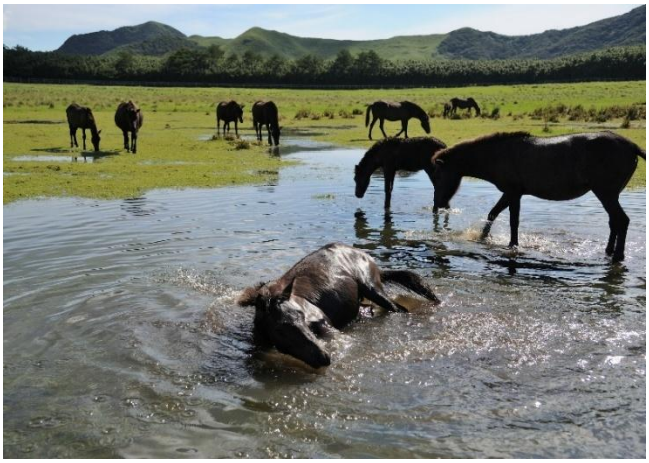
海風（与那国馬）

与那国島の海に面した放牧地で野生状態の暮らしをする与那国馬。海から吹いてくる強い風の中でも逞しく生きています。



水しぶき(北海道和種馬)

川を渡るどさんこ（北海道和種馬）白い馬体と水しぶきの美しさに惹かれ撮影をしました。



雨上がり（トカラ馬）

トカラ列島中之島にあるトカラ馬牧場は、大雨が降ると草地に池ができます。暑い時期、馬たちはつかの間にできたその池で水浴びをしたり水を飲んだりします。池は半日も経たないうちに消滅します。

【彫刻部門】

サイトウカ

2018年　多摩美術大学芸術学部彫刻家卒
2021年　多摩美術大学院彫刻専攻終了
2023年　第54回練馬区民美術展美術館長賞受賞
2023年　第45回記念清興展新人賞受賞

花器『流れ一』　素材　楠

木彫『まどろみ』　素材　楠

小学生から中学生の間、約６年間地元の乗馬クラブに所属。大会にも出ていましたが結果は振るわず、競技として馬に乗る事はあまり好きではなかったように思います。以降馬に乗ることは無くなりましたが時々体験乗馬をしに行くなど、馬のことは変わらず好きでいます。

大学の卒業制作にて、クラブ所属時に好きだった木曽馬をモデルに等身大の木彫作品を作りました。

この「まどろみ」という作品は直径１メートル、全長２メートル以上ある大きな木一つを、首から胴体と脚４本を切り出して作られています。彫刻の不動性を自然に見せる為に、自分の記憶にある長時間その姿でいて違和感の無い立ち寝の姿を制作しました。

然しながら大学卒業の折、このまま保管する場所が無くこの作品を頭と脚を残して分解しました。その残った脚のうち一本を花器として制作したものが「花器‐流れ一‐」になります。「まどろみ」は殆どをチェンソーで仕上げてあり、ディテールに踏み込むのではなく、全体の雰囲気を重視して制作しました。その為花器を作るにあたり「立ち寝」の脚から一本を踏み出す動きを作り出すことが可能となりました。

元来私の作品制作には死が切っても切り離せないテーマとして存在します。私にとって馬と言うのはこれまでの人生の中で一番長く接した動物でありながら、その死を知ることはありませんでした。生命感に溢れた馬を作品としてモデルにする事はとても難しく、大学を出て初めて制作したこの「花器‐流れ一‐」という作品は、過去に制作した作品が一度壊された事で成り立っています。作品としての生死を経て、植物の生死を飾るものとして存在しています。

会場風景

例年、企業展示ブースでの開催でしたが、今年は２階に特設会場を設けていただき、多くの作家の作品を展示することが出来ました。

絵画、写真、彫刻の３部門での展示も初めてでしたが、それぞれの作家の個性が出ており、面白い展示になったと思います。みな馬の好きな方たちばかり。馬談義に花が咲きました。今後も馬の文化芸術活動を広げていきたいと考えています。ご興味のある方は下記に連絡下さい。

伯楽会事務局　kurata-tam@nifty.com 倉田